

# 縄文・古代・中世ムラの暮らしを探る

## ◆発掘調査の成果紹介◆ 平成19年度秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会

平成19年度秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会が1月26日・27日の2日間、市文化会館で開かれ、本市の伊勢堂岱遺跡、森吉山ダム関連遺跡群ほか、大湯環状列石、弘田柵など県内の遺跡の発掘調査成果について報告が行われました。出土品の一部とその概要をご紹介します。



▲遺跡に関心を持つ多くの市民が参観に訪れました

### 縄文人の暮らしと世界観の解明に向けて、伊勢堂岱遺跡

今年度、秋田県内では33件の遺跡発掘調査が行われています。

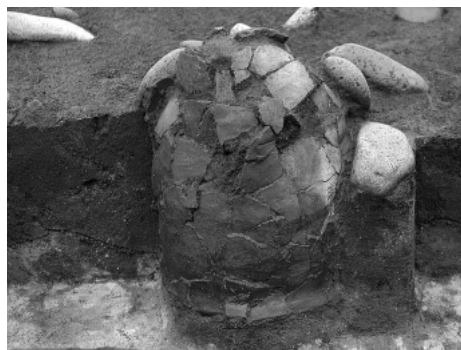
報告会は、発掘調査の成果を市民に紹介するとともに、遺跡から解き明かす秋田の歴史に関心をもってもらおうと県教育委員会が主催したもので、報告と合わせ、出土品や調査の様子が写真パネルで紹介されました。会場の市文化会館ホールには、約200人の市民が聴講に訪れました。26日は、トップバッターとして、市教育委員会の担当職員が、「くよみがえる縄文の聖地」と題し、史跡・伊

勢堂岱遺跡の今年度の第14次調査について報告しました。同遺跡は、平成7年に、大館能代空港アクセス道路建設中に発見された縄文時代後期(約4千年前)の遺跡。これまで、4つの環状列石が確認されており、平成13年には国の史跡に指定されました。

今年度は、環状列石A・B・C・Dのうち、最も南側に位置する環状列石Dの本体を対象として調査を実施しています。ここでは、土器を逆さまに埋めて、その周りを石で囲った土器埋設遺構なども新たに発見されました。

この土器は底が割られ、破片も見つかっていないことから、「遺骨が入っていた可能性もあり、分析して調べてみたい」としています。

このほか多くの発見があった中で、祭祀に関わる石剣や鐸形土製品、三脚石器などが出土したが、その用途が解明されていないことに触れ、「このような特有の道具が使われていた



▲伊勢堂岱遺跡の環状列石Dで出土した土器埋設遺構。土器の底が割られ、逆さまに埋められていました。納骨されていた可能性も

ことや、自然と共生していたことから縄文人は、世界に例をみない独特の世界観を持っていたことや、縄文人が世界的に見ても優れた文化を形成していたことを述べました。

最後に、今年度遺跡北側の杉木立を伐採し、鷹巣盆地や白神山地方への眺望を良くする事業を実施する予定であることを紹介し、「当時の人々が、天体の運行や白神山などの山並みを意識していたことがわかるかもしれない」と、今後の調査が縄文人の精神世界解明に近づくことへの期待を込め、報告を締めくくりました。伊勢堂遺跡の報告に続き、大湯環状列石、古代城柵「弘田柵」、横手市の金沢城跡、墨書土器が出土した大仙市の沖田遺跡について市や県の担当者がそれぞれ今年度の調査の概要について報告を行いました

また、資料展示室やホールロビーには、各遺跡の代表的な出土品が展示されたほか、発掘時のようすを写真パネルで紹介され、遺跡関係者ほか市民らも、関心をもって見入っていました。

### 調査最終年度となった森吉山ダム関連遺跡群

2日目の27日には、森吉山ダム関連遺跡群の調査成果の報告が行われたほか、午後からは、研究者による

古代の秋田の環境をテーマとした講演会が開かれ、歴史ファンらが耳を傾けました。

この日は、平成7年に発掘調査が始まり今年度で調査が終了する森吉山ダム関連遺跡群について報告されました。平成4年にダム地内の遺跡の所在を確かめる分布調査が始められたころは、小又流域にはまだ4遺跡しか知られていませんでしたが、調査を進めるにつれ遺跡の数が増えていき、最終的に61カ所の遺跡の存在が確認されています。このうち、ダム建設によって水に沈む遺跡、堤体工事で壊れる51遺跡の発掘調査が行われ、今年度が調査の最終年度となったものです。

はじめに県の担当者が、「森吉家ノ前A遺跡」「向様田D遺跡」について、

市の担当者が「二重鳥B遺跡」の調査成果を報告したあと、ダム関連遺跡群の13年間の発掘の歩みと成果が発表されました。

### 発掘の成果をもとに、小又川流域の集落の変遷を明らかに

森吉家ノ前遺跡は、平成14・15年の2カ年にわたる調査で、縄文時代から安土桃山時代までの集落跡や墓域があったことがわかり、今年度はさらに、▽15棟の堀立柱建物跡が見つかつた▽その近くには南北に連なる13基の井戸跡があつた▽井戸内からは、箸や下駄、桃の種などが出土したことなどが紹介されました。

また、市が担当した二重鳥B遺跡は、向様田遺跡群や漆下遺跡のそば

にある縄文時代前期(約6千年前)、中期(約5千年前)、後期の集落跡。発掘を担当した市教委の担当者は、今年度、▽縄文時代前期の竪穴住居跡4軒がまとまって見つかつたこと▽中期終わり頃の遺構として、この時期東北地方に特有の複式炉を持つ竪穴住居跡9軒が見つかつたこと▽この時期としては最大のものでつたことなどを紹介しました。

一方、縄文時代後期後半では、竪穴住居1軒のほか土器や石器などの捨て場が見つかつたこと、そこから多量の土器や石器とともに、耳飾りや鳥の頭部を模したと考えられる土製品が出土、その特徴などについて説明し、「遺跡は、繰り返し集落が営まれた場所であることがわかつた。今後は、周辺遺跡の調査成果との比較検討を行い、小又川流域の縄文時代の集落の変遷を明らかにしていきたい」と締めくくりました。

最後に、埋蔵文化財センター北調査課の小林課長が森吉山ダム関連遺跡群の13年間にわたる調査について総括。質疑応答で会場から出された「遺跡はダムの底に沈むが、なんらかの形で後世に残してほしい」との要望には、「今後、広くみなさんの意見・要望を聞きながら、検討してまいります」と、答えていました。



▲二重鳥B遺跡では、複式炉を持つ竪穴住居跡が見つかりました。複式炉は縄文時代中期に特有の炉で、この時期、食文化に何らかの変化があった可能性も指摘されています



▲▲二重鳥B遺跡からも、さまざまな形の土偶や石器などが出土しました。左は、直径が6.2cmもある大きな耳飾り。独特の三叉文が特長的です

